

「西野曠野の墓碑」について

整理番号 与野〇四	題額 曠野西澤翁之墓	題額揮毫 —	碑記撰文 樺嶋石梁	碑記揮毫 —
--------------	---------------	-----------	--------------	-----------

鐫刻 —	撰文建碑年 一八二三・文政六	住所 本町東	場所 長伝寺	備考
---------	-------------------	-----------	-----------	----

一. はじめに
 本石碑は、江戸時代、与野の名主であった西澤曠野の墓碑である。与野市（現さいたま市）文化財指定。

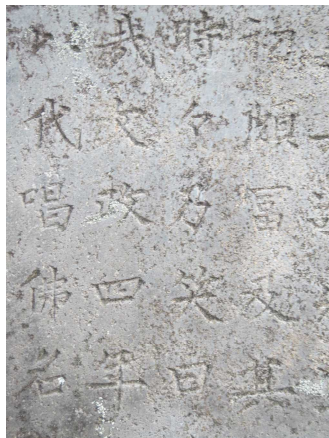
○写真1 墓碑正面



○写真2 「篆題」



○写真3 「碑記」部分



二. 翻刻並に訳注

■翻刻

(正面)

◎題額

曠野西澤翁之墓

(背面)

◎碑記

西澤翁名周字子邦号曠野又號夢澤自稱愚公俗稱萬二後改義右衛門武州足立郡與野里人好學師事我平洲紀先生余與翁相知數十年頗悉其爲人容貌温敦辭氣和平每相對使人如坐春風中是翁之稟乎性也事親至厚其執喪也國制之外衷縗三年每春秋有事必悲泣如在初喪以終其身是翁之孝乎親也鄰里有急必赴救之又豫多畜故衣良藥以與貧人之凍者疾者歲以為常嘗有兄弟爭財相鬪者多年不解翁爲諭之且懷金二十兩貽之兄弟乃和天明中東州大饑翁夜竊携米往救飢人將死者無數是翁之善乎鄉黨也奧人佐藤恆助下帷東都與翁相善恆助無妻子及其老且病往依翁翁愛養幾年其死也喪祭盡禮余之遊毛常也途投于翁時恆助尚存為余泣誦翁之義是翁之信乎友也鄉俗初不甚好讀書後有尚學信道者稍々而出焉余之從紀先生遊尾也土豪若干人途要先生于大宮驛盛服拜趨饗獻極美其敬先生如神蓋翁唱之也是翁之深乎學也固持隱操富貴利達之事絕不措于意家初頗富及其累罹災世產不振而毫無憂色日與子弟讀書講業暇則飲酒賦詩欣然自樂時々乃笑曰陶淵明何人也是翁之高乎志乎德也於戲翁之爲人如此其可不謂之君子哉文政四年九月二十五日疾歿享年七十有九鄉人每月忌日輒集其家必誦孝經一卷以代唱佛名奉遺命也翁娶山口氏生四男長謙字子光嗣家亦好學與余善次順次玉玉先喪次常字子典從余學後為醫冒昆氏五女長適于由井氏次于白石氏次于豐浦氏次于保坂氏次于深谷氏有孫四十餘人余作此文不堪感傷賦一絕曰澤翁高雅德超倫四十年来我甚親何圖遙向墳頭石題罷碑文獨濕巾久留米石梁樺島公禮識

(右側面)

文政六年秋九月建碑貞樹山長傳寺吾□先君
曠野翁之墓
男西澤謙謹誌

*異体字など

○罍 坐。 ○嘗 嘗。 ○盖 蓋。

■ 訳注

◎ 碑記

● 本文 (いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した)

西澤翁、名周、字子邦、號曠野、又號夢澤、自稱愚公、俗稱萬二、後改義右衛門。武州足立郡與野里人。

好學、師事我平洲紀先生。

余與翁相知數十年、頗悉其爲人。

容貌溫敦、辭氣和平。每相對、使人如坐春風中。

是翁之稟乎性也。

事親至厚、其執喪也、國制之外、哀纒三年。

每春秋有事、必悲泣如在初喪。以終其身。

是翁之孝乎親也。

鄰里有急、必赴救之。

又豫多畜故衣良藥、以與貧人之凍者疾者。歲以爲常。

嘗有兄弟爭財相鬪者、多年不解。

翁爲諭之、且懷金二十兩、貽之。

兄弟乃和。

天明中、東州大饑。

翁夜竊携米往、救飢人將死者、無數。

是翁之善乎鄉黨也。

與人佐藤恆助、下帷東都、與翁相善。

恆助無妻子。及其老且病、往依翁。

翁愛養幾年。其死也、喪祭盡禮。

余之遊毛常也、途投于翁。

時恆助尚存。爲余泣誦翁之義。

是翁之信乎友也。

鄉俗初不甚好讀書。後有尚學信道者、稍々而出焉。

余之從紀先生、遊尾也、土豪若干人、途要先生于大宮驛。

盛服拜趨、饗獻極美。

其敬先生如神。蓋翁唱之也。

是翁之深乎學也。

固持隱操、富貴利達之事、絕不措于意。

家初頗富、及其累罹災、世產不振。而毫無憂色。

日與子弟、讀書講業。

暇則飲酒賦詩、欣然自樂。

時々乃笑曰、「陶淵明何人也」。

是翁之高乎志乎德也。

於戲、翁之爲人、如此。

其可不謂之君子哉。

文政四年九月二十五日、疾、歿。

享年七十有九。

郷人毎月忌日、輒集其家、必誦孝經一卷、以代唱佛名。奉遺命也。

翁娶山口氏、生四男。

長謙字子光、嗣家。亦好學、與余善。

次順、次玉。玉先喪。

次常、字子典。從余學、後為醫、冒昆氏。

五女。長適于由井氏、次于白石氏、次于豐浦氏、次于保坂氏、次于深谷氏。

有孫四十餘人。

余作此文、不堪感傷、賦一絶。

曰、

澤翁高雅德超倫、四十年來我甚親。

何圖遙向墳頭石、題罷碑文獨濕巾。

久留米石梁樺島公禮識。

◎建碑の経緯

文政六年秋九月、建碑貞樹山長傳寺。

吾先君曠野翁之墓。

男西澤謙、謹誌。

●訓詁

◎碑記

西澤翁、名は周、字は子邦、号は曠野。又た夢澤と號し、自ら愚公と稱す。俗稱は萬二、後ち義右衛門と改む。

武州足立郡與野里の人なり。

學を好み、我が平洲紀先生に師事す。

余 翁と相ひ知ること數十年、頗る其の人となりを悉くす。

容貌は温敦にして、辭氣は和平なり。

相ひ對する毎に、人をして春風の中に坐すが如くせしむ。

是れ翁の性に稟くるなり。

親に事ふること至厚なり。其の喪を執るや、國制の外に、續を衷すること三年なり。

春秋の有事毎に、必ず悲泣すること初喪に在るがごとし。以て其の身を終ふ。

是れ翁の親に孝たるなり。

鄰里に急有れば、必ず赴きて之を救ふ。

又た豫め多く故衣良藥を畜へ、以て貧人の凍者疾者に與ふ。歳以て常と爲す。嘗て兄弟の財を争ひて相ひ鬪ぐ者有り、多年解けず。

翁爲めに之を論し、且つ金二十兩を懷にして、之に貽る。

兄弟乃ち和す。

天明中、東州大いに饑う。

翁夜竊に米を携へて往き、飢人の將に死せんとする者を救ふこと、無數なり。

是れ翁の郷黨に善なるなり。

奥人佐藤恆助、帷を東都に下す、翁と相ひ善し。

恆助 妻子無し。其の老い且つ病むに及び、往きて翁に依る。

翁 愛養すること幾年なり。

其の死するや、喪祭 禮を盡くす。

余の毛常に遊ぶや、途に翁に投ず。

時に恆助尚ほ存す。余の爲めに泣きて翁の義を誦す。

是れ翁の友に信なるなり。

郷俗初めは甚しくは讀書を好まず。

後ち學を尚びて道を信ずる者、稍々として出づる有り。

余の紀先生に従ひて、尾に遊ぶや、土豪若干人、途に先生を大宮驛に要ふ。

盛服拜趨、饗獻美を極む。

其の先生を敬すること神のごとし。蓋し翁 之を唱ふるなり。

是れ翁の學に深きなり

隱操を固持し、富貴利達の事は、絶えて意に措かず。

家初め頗る富むも、其の禍に罹るを累ぬるに及び、世産振はず。而して毫も憂色無し。

日に子弟と、讀書講業す。

暇あれば則ち酒を飲み詩を賦し、欣然として自ら樂しむ。

時々乃ち笑ひて曰く、「陶淵明 何人ぞや」と。

是れ翁の志と徳に高きなり。

於戲、翁の人となり、此くのごとし。

其れ之を君子と謂はざるべけんや。

文政四年九月二十五日、疾み、歿す。

享年七十有九なり。

郷人 月の忌日毎に、輒ち其の家に集り、必ず孝經一卷を誦し、以て佛名を唱ふるに代ふ。遺命を奉ずるなり。

翁 山口氏を娶る、四男を生む。

長謙、字は子光、家を嗣ぐ。亦た學を好み、余と善し。

次順、次玉。玉は先に喪す。

次常、字は子典。余に従ひて學び、後に醫となり、昆氏を冒す。

五女あり。長は由井氏に適き、次は白石氏に、次は豊浦氏に、次は保坂氏に、次は深谷氏に(適く)。

孫四十餘人有り。

余 此の文を作るに、感傷に堪へず、一絶を賦す。

曰く、

澤翁は高雅にして、徳は倫を超ゆ、

四十年來、我れ甚だ親しむ。

何ぞ圖らん、遙かに墳頭石に向かひて、

碑文を題し罷^をはりて、獨り巾を濕^{うるほ}さんとは。

久留米石梁樺島公禮識す。

◎建碑の経緯

文政六年秋九月、碑を貞樹山長傳寺に建つ。

吾が先君曠野の墓なり。

男西澤謙、謹しみて誌す。

●人物

○西澤曠野翁 寛保三（一七四三）年から文政四（一八二二）年。諱は周、字は子邦、通称万次、西澤家当主としての通称儀右衛門。折衷学派の細井平洲に学んだが、郷里の与野に帰り、名主としての務めを果たす傍ら、地域の教育にも力を入れ、「孝経」の講読などを通して郷人を感化した。また天明の飢饉では資材をなげうって救済にあたるなど、地域振興にもつとめた。与野の俳人鈴木莊丹（一七三二〜一八一五）や久下戸村（現川越市）の儒者奥貫友山（一七〇八〜一七八七）などとも交遊があった。芳野金陵に「西澤愚公傳」がある（「金陵遺稿」所収）。

○山口氏 西澤曠野の夫人。寛延二（一七四九）年から文政十（一八二七）年。墓は長伝寺の西澤家墓域にあり、樺嶋孝継の墓碑銘が彫られている（「与野〇五」）。

○長謙 西澤謙。明和四（一七六七）年から嘉永四（一八五二）年。字は子光、号は蘭陵、西澤家当主としての通称儀右衛門。曠野の長男。父同様、細井平洲に師事した。特に詩に勝れていたという。墓は長伝寺の西澤家墓域にある（墓碑「与野〇六」）。

○次常 西澤常。天明七（一七八七）年から安政五（一八五八）年。字は子典、号は淵斎。昆氏の養子となり、昆家としての通称泰仲。細井平洲、樺嶋石梁に学んだが、のち医術に転じた。芳野金陵に「昆子典墓碣銘」（「金陵遺稿」卷六）がある。

○細井平洲 享保十三（一七二八）年から享和元（一八〇一）年。本姓は紀氏。号は平洲または如来山人、諱は徳民、通称は甚三郎。字は世馨。尾張国知多郡平島村（現愛知県東海市）出身。朱子学等一学派の教えにこだわらず、様々な学派学説の長所を取るといふ、いわゆる「折衷学」の立場であった。米沢藩や尾張藩に招かれて侍講や藩校の学長を務めたりした。米沢藩の上杉鷹山からの信任を受け、米沢市の松岬神社に、上杉鷹山と共に祀られている。

○樺島石梁 宝暦四（一七五四）年から文政十（一八二八）年。石梁は号で、通称は勇七、諱は公礼、字は世儀。久留米藩出身で、天明六（一七八六）年、細井平洲の門に入る。以後平洲の私塾「嚶鳴館」で学び、塾長にまでなった。久留米藩に戻ると、藩政の刷新にとめるほか、久留米藩藩校明善堂の設立にあたり、その校長となった。墓所は久留米市寺町の真教寺にある。本墓碑銘を書いたのは、六十八歳のとき。彼の文集である「石梁遺文」に収録されている。

●注

- 曠野 この号について、渡辺刀水「西澤曠野と其子孫」(以下「渡辺」)は「多分武蔵野の曠野と、職業の染色業とを洒落て字を宛てたものと思ひます」という。
- 俗稱萬二 「渡辺」は、曠野の書簡類には「萬次」と表記されているという。
- 後改義右衛門 「渡辺」は、西澤家当主の通り名は「儀右衛門」であるという。
- 武州 武蔵国。
- 我平洲紀先生 我は碑文の撰者樺島のこと。平洲紀先生は、細井平洲。
- 悉 知り尽くす。
- 温敦 熟語はないが、敦で、素朴で誠実なさま、飾らず温厚なさま。
- 辭氣 はなしぶり。
- 和平 やわらいでおだやかなこと。「礼記」楽記に「故樂行而倫清、耳目聰明、血氣和平。移風易俗、天下皆寧(それゆえ正樂が行われると人倫が清くなり、人がこれを聞けば耳目は聡明になり、血氣は和平になる。風習を移し土俗を変えて悪事がなくなれば、天下はすべて安泰になる)」とある。
- 如坐春風中 宋学の程明道は、弟の程伊川が激しい学風であったのとは異なり、温和で人を教化する人となりであったと言われる。朱光庭という人が初めて程明道の門に入り、教えを受けた時期を振り返って「在春風中、坐了一箇月(春風の中に一箇月座っていた)」と述べたという(「近思録」)。穩やかで人を引きつける明道の人格をたどって春風と言ったのである。九州大学の楠本正継名誉教授が主宰した宋明思想の研究用図書は「坐春風文庫」と名付けられた。
- 執喪 喪(死者を悼み祭る儀礼)を執り行うこと。
- 國制 国家が定める制約。当時、喪について国家が制約を定めているわけではないので、世間一般のやり方、くらしいの意味ではないか。
- 衷繖三年 衷は、上着の下に着ること。繖は、喪服の一種。胸につける小片で、三年の喪に服するものが身につける。三年の喪は、父母が亡くなった時に子が服する儒式の喪。
- 急 危急の事態。
- 故衣 古着。
- 歳以爲常 毎年の恒例。
- 閱 仲違いして口論する。
- 天明中、東州大饑 天明年間(一七八一〜八九)の冷害や洪水、一七八三年の浅間山噴火とその降灰などの自然災害を契機として東日本を中心に各地で大飢饉が発生した。享保・天保とならば江戸時代の三大飢饉。
- 奥 陸奥国。
- 佐藤恆助 不詳。
- 下帷 「帷を下す」とは、カーテンで廻りを囲って学習環境を作ること。ここでは入門して学問をすること。おそらく細井平洲の「嚶鳴館」であろう。
- 東都 江戸。
- 愛養 いつくしみ養う。
- 幾年 何年間か。
- 毛常 両毛(上野、下野)と常陸。
- 途 途次、途中。

- 誦 説く。
- 義 渡辺は「義侠心」と訳す。
- 讀書 書籍を読み学問をすること。
- 少々 少しづつ、だんだんと。
- 尾 尾張。
- 土豪 その土地で勢力や財力があるもの。
- 盛服 盛装。美しくきちんと着飾る。
- 拜趨 貴人の左右にはべる。
- 饗獻 熟語は無いが、客人をもてなし酒食などを進めることだろう。
- 極美 最高の最もよいもの。
- 隠操 俗世間から逃れたいと願うところ。
- 富貴 財産や地位。
- 利達 立身出世、栄達。
- 措于意 措意は、気にとめる、気にかける。
- 世産 熟語は無いが「世業（代々伝わってきた事業）」に同じだろう。
- 毫 極めて細長い毛。ほとんど、全く無いことの喩。
- 講業 学業を講じる。
- 欣然 うれしく喜ぶさま。
- 自樂 自然に楽しむ。陶淵明「桃花源記」に「黄髮垂髻，並怡然自樂（髪が黄ばんでしまった老人やお下げ髪の子どもまでもが、にこにことして楽しげである）」とある。
- 陶淵明 四〜五世紀の東晋の詩人。田園詩人と呼ばれる。没落した地主の家の出で、生活のために度々仕官したが、ついに故郷の江西九江潯陽に隠棲した。以後、田園生活を送り、自然・酒・詩を愛して一生を終えた。「帰去来兮辞」「帰園田居」「飲酒」等があるが、一漁夫が俗世間から離れた平和な別天地を訪れる「桃花源記」も有名。
- 何人 どんな人。共感を込めて「どんなひとだったけね」と言っているのか。
- 君子 小人の対で、徳の高い立派な人。儒教世界における最高の褒め言葉。「論語」学面に「人不知而不愠、不亦君子乎（人が自分のことを理解してくれなくとも気にかけない、いかにも君子だね）」とある。
- 文政四年 西暦一八二一年。
- 孝經 儒教の經典。孔子と弟子の曾子との問答体で孝のあり方を説いたもの。「身体髮膚これを父母に受く。あえて毀傷せざるは孝の始めなり」の句は有名。家庭道徳であった孝を、政治思想のレベルに高めて大系化したもので、総文字数二千字程度と比較的短い中に思想内容がコンパクトにまとめられていることから、儒教の入門書として広く長く読み継がれてきた。
- 唱佛名 「南無阿弥陀仏」を唱えるなど、仏教の法要の際にお経や仏の御名を唱えること。
- 冒昆氏 冒は他の姓を名乗ること。「渡辺」には、幕臣の昆氏の養子となったとある。
- 澤翁 別号の夢澤を、翁と併せて二字句にするために略した。
- 高雅 気高く正しい。
- 超倫 絶倫。倫は、同類、仲間。同類のものから抜き出っていて、比べるものがないほど勝れたさま。

○圖 考える、推測する。

○遙 石梁は墓石のすぐ前で墓碑銘を作り、詩を賦している。しかし、曠野と石梁は、あの世とこの世とに分かれてしまったことから、その距離感を「遙」の語で表しているのだろう。

○墳頭石 墳頭は、盛り土した墓の隆起した部分。ここでは墳頭石で、墓石のことだろう。

◎建碑の経緯

○先君 亡父。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

◎碑記

【翁の名前と出自】

西澤翁、諱は周、字は子邦、号は曠野。又た夢澤とも号し、自らは愚公と称した。俗称は万二で、のちに当主を継いで義右衛門と改めた。

武蔵の国足立郡与野の里の人である。

【私権嶋石梁と曠野】

翁は、学問を好み、私の師匠でもある細井平洲先生に師事した。（そこで私も翁と知り合い、交わりが始まった）。

私は翁と知り合ってから数十年になり、彼のひととなりは知り尽くしていると見えよう。

【翁のひととなり、人間性】

容貌は素朴で誠実、話しぶりもやわらいで穏やかである。

彼と向かい合って過ごしていると、いつも、まるで春風の中に座っているかのような、穏やかな心安らぐ気持ちになるのであった。

これは翁が生まれつき持っているその人間性によるものである。

【翁の孝行ぶり】

親への孝行は極めて手厚いものがあつた。親のために葬儀を執り行うにあたっては、通常のやり方を超えて、三年の喪に服した。

毎年、春秋のきまつた法要においては、いつも、初めての葬儀のときのように、悲しみ泣くのであつた。それは終生変わらなかつた。

これは翁の親への孝の心を表したものである。

【翁の郷党への善行】

近隣に緊急事態が起これば、必ずそれを救済するために赴いた。

また、あらかじめ、古着や良薬を備蓄しておき、凍えたり、病気になった貧しい人びとができればそれを施した。これは毎年恒例のことであつた。

かつて、財産をめぐる争い、仲違いをしている兄弟がいた。そのいさかいは、何年たつても解決しなかつた。

翁は仲介に入って二人を教え諭し、さらに自前で二十両のお金を用意し、二人に贈つて和解するようすすめた。

するとこの兄弟は、翁に感じて仲直りをし、諍いは止んだ。

天明年間、東日本で大飢饉が発生した。

翁は毎夜、こっそりと米を携へて往き、いまにも飢え死にしそうな人にこれを与えて命

を救った。この救済措置は、数え切れない回数に上った。

これは翁が郷党に善意を抱き、善行を施したことである。

【翁の友への誠実さ】

陸奥の国の人で、佐藤恆助という者がいた。

江戸へ出て、私塾に入門し、学問につとめたが、翁と親しかった。

恆助には妻子がなかった。そこで歳を取って病に冒されると、与野へ行き、翁を頼った。

翁は彼を何年もいづくしみ養った。恆助が亡くなると、翁はその葬礼を、礼を尽くして挙行した。

私が両毛（上野・下野）と常陸に遊歴したとき、その途次、与野の翁の家に立ち寄ったことがある。そのとき、恆助はまだ存命で、翁がいかに自分によくしてくれているかを泣きながら話してくれたのだった。

これは翁の友人に対する誠実さの表れである。

【翁の深い学問への傾倒と重視】

与野の郷里の習俗として、初めはあまり学問を好んではいなかった。

それが翁が与野に帰ってから、学問を学び、道徳を信じて実行するものが、だんだんと出てくるようになった。

私が平洲先生に扈従して尾張に遊行したとき、与野界隈の有力者たちが、大宮駅で平洲先生を出迎えた。

彼等は盛装し、先生を礼拝してお仕えし、最高のもてなしをしてくれた。

そして、平洲先生をまるで神様のように崇拜した。

思うに、翁がこれを主唱したのである。

これは翁がとて学問に重きを置いていたことの表れであろう。

【翁の志行と人徳の高さ】

世俗から距離を置く生き方を固持し、財産や地位、立身出世などの事柄は、気にかけることすらしなかった。

その家は、初めはとて裕福であったが、火災に何度も罹るうちに、家業が振るわなくなった。しかし、翁がそのことを憂えたり心配することは全くなかった。

毎日子弟と書を読み、学業を講じた。

その間、時間ができると酒を飲み、詩を作つてうたい、にっこりとして自然に楽しんだ。

時折、笑いながら「陶淵明って、どんなひとだったっけね。私たちのような人だね」と言うのであった。

これは翁の志行と人徳の高さの表れである。

【君子としての翁】

ああ、翁の人となりは、以上のごとくである。

これこそ、「君子」と呼びうる人格であろう。

【翁の逝去と「孝経」の誦読】

文政四年九月二十五日、病に罹り、逝去した。享年七十九歳であった。

村人たちは、毎月の命日毎に翁の家に集い、「孝経」一巻を誦読した。命日の法要に仏名を唱えることに代えたのである。これは翁の遺命を守つてのことである。

【翁の家族】

翁の妻は、山口氏であった。四人の男子を生んだ。

長男は、本名は謙、字は子光といい、家を嗣いだ。彼も父親同様学問を好み、私とも友善である。

次男の順がいて、三男の玉がいたが、玉は翁に先立って夭逝した。

その次の四男は、本名は常、字は子典といった。私のもとで学んだが、後に医術を学び医者となった。昆家の養子となり、家を継いだ。

女子は五人いた。

長女は由井氏に、次女は白石氏に、三女は豊浦氏に、四女は保坂氏に、五女は深谷氏に、それぞれ嫁いだ。

孫が合計で四十人以上いた。

【石梁の賦詩】

私は、この墓碑銘を書いているうちに、感傷に堪えられなくなり、ついに絶句一首を作った。

それは以下の通り。

夢澤翁は、気高く正しい性質で、その人徳は比べるものがないほど高いものがあつた。

この四十年間というものは、私は翁ととても親しくしてきた。

それが、どうして予測できただろうか、遙か彼方に行つてしまった翁に対し、

その墓石に向かつて墓碑銘を書き終え、一人残された私が涙を流すことになろうとは。

久留米の号石梁、樺島公礼が記す。

◎建碑の経緯

文政六年秋九月、石碑を与野の貞樹山長伝寺に建てる。

これは吾が亡父、西澤曠野の墓である。

男子である西澤謙が、謹しんでこれを記す。

三、資料

(一)「新編武蔵風土記稿」(文化三十(一八三〇)年)卷一五五 足立郡之二十一

● 與野領

◎ 與野町・寺院

○ 長傳寺

「浄土宗、江戸増上寺末、貞樹山觀智院と號す、古は御朱印地なりしが、後故ありて収公せられしと云、開山は普光觀智國師なれど、それより以前草創ありし古刹を中興せしなるべしと云、本尊は彌陀の立像長三尺許、作は定朝とも或は運慶とも云、内佛の本尊は三尊の彌陀長一尺三寸許、恵心の作なり、又愛染の像あり、長五寸許、運慶の作なり、佛前に葵御紋を彫たる木の香爐一箇あり、公より御寄附のものなりと云ふ」

(二)「武蔵国郡村誌」(明治十五(一八八二)年) 卷之十

◎ 與野町・仏寺

○ 長傳寺

「縦四十八間横四十六間面積六百二十四坪町の北端にあり浄土宗東京芝増上寺の末派たり
(以下「風土記稿」)」

四. 主な参考資料

① 翻刻

- ・『埼玉県教育史金石文集(上)』(一九六八)。
- ・『与野市史 中・近世史料編』(一九八三)。
- ・「石梁遺書」巻七(樺嶋石梁先生顕彰会、一九二六)に「西澤子邦墓碣」として本文が掲載されている。「石梁遺文」は石梁の著述をまとめたものだが、全八巻中、第四・五巻が文集、第七・八巻が文集後編で、第五巻に「墓誌碑表」十二首、第七巻に「墓碣」五首が選ばれている。「西澤子邦墓碣」は第七巻。石梁が墓碑の類いはたくさん作っているはずだが、その中でもよいものを選んで遺文に収録している。その「よいもの」に曠野の墓碑が選ばれていることは、石梁と曠野との関係の深さ、石梁の思い入れの深さが感じられるよう。

② 論文など

- ・芳野金陵「西澤愚公傳」(『金陵遺稿』巻六)。
- ・高瀬代次郎『細井平洲の生涯』(巖松堂書店、一九三六)。「西澤愚公と高山彦九郎」の項があり、西澤曠野のエピソードを記すが、元ネタは金陵の「西澤愚公傳」のようである。
- ・渡邊刀水「西澤曠野と其子孫」『埼玉史談』(四ノ五、一九三三)、『渡辺刀水集』四(青裳堂書店、一九八九)所収。
- ・『与野市史 通史編 上巻』(一九八七)。

③ 関連碑文

- ・「西澤曠野夫人の墓碑」(「与野〇五」)
- ・「西澤蘭陵の墓碑」(「与野〇六」)
- ・「史蹟西澤曠野先生墓所碑」(「与野〇七」)

以上

二〇二四年三月 薄井俊二訳す